

暗唱のすゝめ

〜空っぽはやめよう〜

僧侶は、どのようにして(お)経を覚えるのでしようかね。皆さん、考えたことはありませんか。調べたわけではありませんが恐らく、覚えようとして覚えたのではないと思います。毎日のお勤めで読経を繰り返すうちに、染みついてしまうのだと私は考えています。国語の教師を三十七年間もやっている、教科書に載っている教材が染みついてしまいます。とりわけ、古典については、教科書がなくても全学年の教材が頭に入っています。暗記しようと思わなくても、毎年毎年読んでいると暗記できてしまうのです。現在、三年の国語では、「おくの細道」の学習に取り組んでいます。今日は冒頭部分の暗唱に挑戦しようとしていました。やはりそこには個人差がありました。覚えようと思うから生まれる差です。読む回数に個人差はあっても、一人一人が暗記できるまで読みを重ねることが大切です。

「なぜ暗記をしなければならぬのか」と思う人もいます。そうですね。ひとことと言うなら、それは「古典のリズムや日本語の言い回しが実感できるから」と私は考えています。身をもって感じるものは言葉では説明できません。それが感じられるレベルにたどり着く前に、「面倒だ」「(暗記しても)役に立たない」という気もちが生まれれば、古典のよさはわからないままでしょう。

「おくの細道」や「平家物語」(二年国語)は、漢語(音読みで読む言葉)を効果的に交えて力強く書かれていますので、メリハリをつけて流れるように読むことができます。私は生徒たちの前で読み終わると、いつも「気もちよさ」を感じていました。そして、僧侶の読経もそんな感じなのかなあと感じていました。

さらには、暗唱についてこんなことも言えます。一度暗唱したものは忘れてしまっても、次に思い出すとするとときに、多くの時間や手間をかけなくても蘇ってくるということ。です。

歌詞がそうですね。昔口ずさんでいたり、好んで歌っていたりした曲の歌詞は、忘れていた部分があっても聞けばすぐに思い出せますよね。一度自分の記憶の引き出しに入ったものは、そんなに簡単に忘れるものではありません。

とりわけ、脳細胞の若い皆さんは、覚えようと思えばいくらでも覚えられます。覚える量に限界はありません。詰め込むだけ詰め込み忘れたら後で思い出せばよいのです。覚えられる引き出しがたくさんあるのに、空っぽのまま若い時を過ごすことは非常にもったいないと私は思います。

一つだけ言うておきます。学力は覚えた量ではありません。覚えることだけが勉強ではありませんからね。誤解しないでください。ただし、古典のリズムや言い回しの特徴が染みついた者は、新しい古典に出合っても、さほど苦勞せずに読めるものです。伸び盛りをからっぽで過ごすことはもったいないからね。(十一月十六日記)